

愛と幻想の

ファシズム

下

村上

龍

愛と幻想のファシズム(下)

一九八七年八月二〇日 第一刷発行

著者——村上 龍

© Ryu Murakami 1987, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四一—二二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

愛と幻想のファッション（下）

装幀

横尾忠則

狩猟社に宣伝局が誕生した。それまでは、事務局の中に若干名の対マスコミ要員がいるだけだったのだが、その組織を拡大して、ゼロが局長となった。ゼロを起用することについて異議を唱える者はいなかった。宣伝局の最初の仕事としてゼロが卓抜なアイデアを示したからだ。

「暴露雑誌を奪う」

ゼロはそう言った。中南米三国の債務不履行に発する恐慌の中で、出版業界は空前の危機を迎えた。資本の大小を問わず、借入れ金を通じて派手な宣伝と企画を続けるような会社は、あっという間に潰れた。恒徳書店は、それまで地味な教養書を主に出版する中堅会社だったが、「ザ・ピープルズ・ヴォイス」という雑誌を創刊し、それが当たって、生き残ることができた。

「ザ・ピープルズ・ヴォイス」は主に政財界、労働界、それに著名人のプライバシーを紹介する暴露雑誌だった。首都圏と大阪を中心に、フリーのジャーナリスト、他社を解雇された編集者やカメラマン、それに学生や一般の市民とも契約をして、数百人ともいわれる監視・暴露組織を作り上げた。恐慌・不況時にはスキャンダルは好まれるものだ。他人の、しかも権力者や著名人の失敗や密会や不幸

は、弱者達の絶好のカタルシスとなる。その徹底した俗悪・下品さが功を奏して、競合誌を押さえ、半年足らずのうちに部数は百万を越えた。

皮肉なことに、ゼロはSMクラブのスキャンダルの際、何度も「ザ・ピープルズ・ヴォイス」に登場していた。

「別に、自分が載った雑誌だからというわけではなくて」

と、ゼロは宣伝局発足に関する幹部党員会議で、きりだした。洞木も、山岸良治も、変わったゼロに驚いていた。酒による濁りが完全に消え、目には鋭さが戻っていた。頬は僅かにこけ、話しぶりは自信に充ちていた。

「ボクが考えている宣伝というものを展開する上で、最も適しているのがこの『ザ・ヴォイス』なんです、どういふことかと言うと、つまり、これからは、防御的な戦法では取り残されるばかりではなく、潰されてしまうということです。『クロマニヨン』を見てもそれは明らかでしょう」

山岸良治が顔を上げてゼロを見た。

「昨年末の円の暴落以後、左、右とも街頭でのデモンストレーションが激しくなりましたが、その中で、『クロマニヨン』は、最も強力で、規模も大きいにもかかわらず、徹底的に攻撃的であることで、狩猟社のプライドを維持するだけではなく、狩猟社が、数ある政治結社の中でも群を抜いた戦闘部隊を持つことを示しました、組織の結束はより強固になり、支持者も増やすことができたのは、何よりも『クロマニヨン』の攻撃精神だと思うのです」

そこまで話して、ゼロは山岸良治の方を見た。何を今さら、という顔を山岸は見せたが、賞められて、悪い気分ではなさそうだった。

「ゲッペルスは、ヒトラーからベルリンの大区区长に選ばれて、『アタック』という機関紙を発行しました。現在、狩猟社は、日増しにその勢力を拡大していますが、この時機にこそ、必要なのは、攻

撃だと思っています、つまり、攻撃的な、宣伝です、

ゲッベルスは、宣伝を次のように定義しています、『どんな種類の宣伝が有効か、また逆に無効かを決定する理論上の公式はない、望んだ結果を生み出す宣伝がよいのであり、それ以外はすべて悪い宣伝である、たとえどれほど魅力があってもである、宣伝の任務は、人を楽しませることではなく、結果を生み出すことにある……』

当然のことですが、宣伝は、目的にたどりつくための手段にすぎません、そして、最も大事なものは、わが狩猟社の、目的です」

片山医師が、領きながら聞いていた。千屋はメモをとり、洞木は睨むような目付きでゼロを眺めた。ゼロはその回復ぶりを示しつつあった。

「それは、合法的であれ非合法的であれ、制度的であれ反制度的であれ、近代的であれ前近代的であれ超近代的であれ、ドメスティックであれインターナショナルであれ、権力を手にすることであり、権力とはニーチェの指摘を待つまでもなく、意志の自由、すなわち服従しなければならぬ奴隷共に対する優越の感情を、維持することです、

さて、全体的なシナリオは、洞木事務局長にまかせるとして、必要なのは、さらなる攻撃であることは間違いありません、権力を拡大していくには攻撃しかないのは明らかです、

宣伝局では、当然機関誌も発行しますし、マスコミからの取材の整理もやりますが、攻撃のための主要武器として、『ザ・ピープルズ・ヴォイス』を乗っ取るつもりであります、別に自分のスキャンダルが載った雑誌だからということではないのですが……」

山岸や千屋が笑った。以前のゼロに向けられたような侮蔑の笑いではなかった。この時期、狩猟社は方針を決めかねていた。俺が、北海道旅行でいなかったせいもあるが、洞木は元科学雑誌編集者らしく確固としたイデオロギーの確立を望んでいたし、山岸良治は他派の武闘勢力に対して制街頭権を

めぐって戦う毎日だったし、千屋裕之は対企業との資金援助に関する契約や十数件にのぼる訴訟対策に忙殺され、高榎は予想のつかなかった円暴落のショックから立ち直れないでいた。そんな、閉塞・停滞感の充満は狩猟社だけではなかった。幼児から政府に至る日本中が、先が見えず、混乱した事態の処理だけに追われ、怯え、苛立ち、根本的解決のための方法など考える余裕もなかった。その原因ははっきりしている。日本が弱いからだ。日本は、アレンジの国、変圧器のような役割の国だった。送電が停止されれば、役立たずとなる。送電の権利を行使するのは、ジェローム・ウィッツ率いる『ザ・セブン』だ。

そんな停滞感にゼロが裂け目を入れようとしていた。全員が新しい風を待っていたのだ。

「恒徳書店は『ザ・ウォイス』が売れている割には収支はぎりぎりの黒字といったところで、それは、スキャンダル誌という性格で広告収入がないこと、監視組織、これは数百人といわれていますが、この人件費と、社長に、教養書を出版するという未練がまだあるからです、

桜井さんに調べて貰ったのですが、恒徳書店は実に堅実な経営を続けており、当然、株式の公開もされていなくて、金融機関からの借り入れもありません、従って買収は効果を示しません、ただ、最近の騒然としたムードの中で、恒徳書店が狙われているのは確かです、これは確実な情報ですが、社長は怯えています、社長は七十を越えたただの教養人で、マーテルのコニャックとギリシャ神話があればそれでいいという無害な人物です、思想的にはリベラルで、都合のいいことに、『ザ・ウォイス』に、誇りを持ってません、

面倒なのは、『ザ・ウォイス』編集長の、土井垣という男です、これは実にタフな男です、役員を兼ねていて、社長や労組にも信頼されています、叩き上げの男で、スキャンダル誌の有効性にももちろん自信を持っています、だから、この土井垣を消せば、狩猟社は社長を脅して、テロから会社を守るという口実で、経営参加することができず、

コストの問題ですが、これは明らかに、宣伝局で同種の雑誌を出すよりも安くすみずみ、何よりも魅力なのは『ザ・ヴォイス』がこの三年間で集めた情報で、あるデータ・ファイル社に保管されていますが、これだけで恐喝に使えば何十億と稼げるでしょう、それは、趣味と性癖を列挙した裏の紳士録で、著名人、政財界人の、暴力団とのつながり、行きつけの飲み屋、常宿、かかりつけの医者、病氣、さらに情婦の住所、そして、ありとあらゆる秘密クラブの会員名簿、コールガール組織、覚醒剤・不法な精神安定剤の密売ルートとその顧客、また精神科医や整形外科医の患者リストとカルテ、すべて、有力な個人攻撃の材料となるものばかりであります、

宣伝局はこの情報を手に入れるばかりでなく、新たに増やしていくつもりです、円暴落の後に、株を上げつつある親ソ派を叩く材料は決して多すぎるといふことはないのです、

そして、狩猟社が権力を拡大すればするほど、『ザ・ヴォイス』を中心とした宣伝局の監視・暴露組織は、その効力を発揮していくと思います、

理想はやはりゲッベルスが作りあげたプロパガンダ・マシーンです、すべての情報を我々だけが握り、暗室の中の囚人のように弱者を支配する、暗室の中では、ペンライトでさえ太陽に見えてしまうものです、監視と密告の網だけを張りめぐらし、妻が夫を、子供が親を密告するように、そこまで、徹底しなければいけない」

わかった、協力しよう、と山岸良治が言った。その、編集長の土井垣を消すのは、「クロマニヨン」がやってやるよ……

この幹部党員会議の三週間後に、ゼロは「ザ・ピープルズ・ヴォイス」を手に入れた。酒が好きだった元編集長土井垣は一リットルのウイスキーを体内に流し込まれて、愛車と共にトラックと衝突した。ゼロは旧「ザ・ヴォイス」の監視・密告員だった一人一人と会い、狩猟社に忠誠を誓わせ、従わないものには、「クロマニヨン」が相手をした。坂口勝という男を、ゼロは新しい編集長とした。俺

やゼロを始めとして、幹部党員には、「古い友人」と称する多くの失業者が、狩猟社に入れてくれ、と電話や書面で頼み込みに来ていた。学校の同級生もいたし、近所の酒屋の息子も、遠い親類も、昔の仕事仲間もいた。狩猟社に入れば食えると思ったらしい。ほとんどは雑魚ばかりだったが、その中で坂口勝は少しばかり違っていた。坂口は、昔ゼロと一緒にエロ本やエロビデオを作っていた。一時は杉並に家を買いいメルセデスに乗りクレイ射撃やフライフィッシングを楽しんだようだが、恐慌後、大衆性産業に敵しさを増した警察に潰され、金融業に転じたがひどいインフレと不況で失敗し、すべてを失ってしまったのだった。

「女房と娘に客をとらせて、それで、食ってました」

俺に会った時、坂口は冗談とも本当のことともつかぬ表情でそんなことを言った。ゼロは、昔二人で作っていた雑誌を見せてくれた。スーパ―変態マガジンとサブタイトルのついたその雑誌には、大股開きの女達の他に、死人や毒物や麻薬の写真と記事があった。

「ボクは今でも毎日オナニーしてます、毎日です、女房ともやっていますし、娘とやろうかなと思う時もあります、それは畜生にも劣るのでそんなことはしません」

短い口ひげと蝶ネクタイの坂口は真剣な顔でそんなことを言う男だった。

「僕はタイで九歳の少女を買ったこともありますし、そういうことが好きなんです、そういうこととというのは、本当のことが好きだということ、だから、狩猟社は好きです、最近少しおかしくなったのかなと思ってました、アメリカの大企業から金を貰ったり、いや、怒らないで下さい、でも剣介にはずっと狩猟社に参加させてくれと言っていました、権力が大好きですから、僕は、人生の真実は差別にしかないと思ってるんです、ニーチェと同じです、ニーチェほど頭はよくないですが……死んだ方がましな人間がまだいっぱいいます、たぶん僕の任務はそいつらを潰してやることです、う、僕は、情熱を持って、楽しみながら、やります」

「ザ・ヴォイス」のスタッフはそのまま残された。最初は当然ゼロや坂口に反感を持ったようだが、誰も辞める者はいなかった。解雇の恐怖は日本中を被っているのだ。恒徳書店の労組が社長に抗議してストを起こしかけたが、「クロマニヨン」という名前を出しただけで、震えながら中止した。

連日の街頭示威行為で、「クロマニヨン」の実力は外国にまで知られるようになっていた。負傷者や逮捕者も増えたが、横浜西郊にある訓練センターには職のない連中が押し寄せ、山岸らが厳選して隊員は着実に増えていった。取材に來たベルギーのテレビ局は「銃火器を持たない、世界最強の私設軍隊」と、西ドイツの雑誌は「旧ナチ突撃隊よりも残虐で、かつ統制がとれている」と評した。「クロマニヨン」は、何よりも労働組合から恐れられ、そして目の敵にされた。シャノン・フーズ労組鎮圧以来、「クロマニヨン」はありとあらゆる労組の集会、特に放送・出版労連、日教組の集会に姿を現し、襲いかかった。恒徳書店労組などものの数ではなかったわけだ。

「ザ・ビーブルズ・ヴォイス」は、「ニュー・ヴォイス」と名前を変えて、最初は目立たぬように、やがて公然と、牙を剥きはじめた。攻撃の目標は、一見、昔と変わらないように見えたが、その実、はつきりと区別されていた。「ザ・セブン」系ではない企業、労組幹部、社会新党、共産党、左翼と見られる作家・学者・芸能人、地方の革新首長、それらが狙い撃ちされた。旧「ザ・ヴォイス」のデータも当然使われたが、ゼロと坂口は必要とあればスキャンダルを演出して見せた。七週連続して、家族一人一人のどぎついセックスを最大限に誇張して暴かれた大阪のある革新市長は、訴訟を戦う気力も奪われて、首を吊った。シベリア開発に伴う利権を徹底的に突つかれた民族系の天然ガス会社は、会長が自ら五千万の金を持って宣伝局に泣きついてきた。動力車労連の副委員長が組合費でどこへ旅行して何人の女を抱いたか「ニュー・ヴォイス」は、数字と芸者の裸の写真をあけて暴露した。だが、ゼロと坂口は政府・自民党や「ザ・セブン」系企業、警察や司法当局には手心を加えた。強力な指導者のいない政府にはもはや短期間で狩猟社を潰す力などなかったが、俺達は当面の敵を親ソ派に

しぼり、余分な敵は作りたくなかったのだ。

「ニュー・ヴォイス」は、豊富な資金源、優秀な法律顧問団、そして「クロマニヨン」と並んで、狩猟社の強力な支えとなった。ゼロは地位を回復し、坂口はすぐに幹部黨員となった。

だが、円の暴落後、対米不信の波の中で、接近を図るソビエトとその一派も黙ってはいなかった。困窮に喘ぐ日本の前に、ソビエト連邦が新しい救世主として浮上したことについてはさまざまな原因が考えられた。

恐慌以前からソ連は日本の技術と人材と資本を求めていた。日本の経済人の中にも、主にシベリア開発を通じて、原料供給、新市場開発のため対ソ接近を進めようとするものもいたが、対アメリカ、対中国関係の影響で、積極的な進展はなかった。だが、恐慌後、情勢は大きく変化した。鄧小平が開放政策を推し進めてきた中国だが、指導者が代わると、その体制はゆるやかに後戻りを始め、中南米三国の債務不履行に端を発する恐慌後は、世界で最も早く保護主義に走ったのだった。一九八〇年代後半は中国をとりまくアジアにとって、指導者の世代交代が進み波乱の時期となった。フィリピン、タイ、マレーシア、インド、インドネシア、シンガポール、北朝鮮で、指導者が交代した。中国が、開放体制を凍結させて、様子を窺う態度に出たのも当然のことだ。そして世界経済恐慌の発生はさらに中国の門戸を固く閉じさせてしまった。アメリカやEC諸国もやがて、為替管理を開始し、関税障壁を新たに設定するようになり、アジア諸国の新指導者は強硬にカウンター・トレードを主張して譲らず、窮地に立った日本産業界・政府は、当然のこととしてソビエトに目を向けざるを得なくなったのだ。インフレに次ぐ不況は貿易によって打破されるという、すでに時代遅れとなった神話をまだ信じていたわけだ。

「ザ・セブン」が結成されると、その貿易で最も活躍して貰いたい企業が、国家利益に反する行動をとり始めた。「ザ・セブン」からしめ出しをくわないように、それらの企業は続いていた金融自由化

のムードの中で、ドルの侵略を手引きし、ありとあらゆる抜け道を考案して政府の為替管理をかわそうとした。国民の反感は増大し、「ザ・セブン」系国内企業のドル買いによって円が暴落した時、その怒りは頂点に達した。当然ナショナリズムが頭をもたげることとなった。だが、その民族主義的感情は戦前の天皇のようなシンボルを持たず、乱れ飛ぶ情報に踊らされて、結実する核となるものを発見できなかった。プライドが持てなかったのだ。日本国民にあったのは、世界から見捨てられたという寂しさと怒りだったが、その怒りをどこへ向けていいのか、わからなかった。

相互依存は恐ろしい勢いで進んでいた。日本人はそのことに最も無知な民族だった。南の人々、第三世界の人々、アジアの中進国の人々はよく知っていた。彼らは痛めつけられていたからだ。自分達の怠慢や失敗だけが、不幸の原因ではないのだと、よくわかっていた。遠い国の通貨管理のせいで、例えばアメリカが金利を〇・五パーセント上げただけで何十万かの幼児が飢えるという事実を知っているのだ。

自分の努力だけで経済大国になったのだと無邪気に信じていた日本人は、不意を打たれて立ちすくむだけだった。戦前のように情報が閉ざされていれば、列強が理不尽に苛めにかかっていると思ひ込み、一億一丸火の玉になれたかも知れない。

しかし、一九八〇年代後半、情報は重複し、ねじくれて洪水のように降り注いだ。混乱しながらも日本国民は少しずつ理解していった。それまでの繁栄は、米ソ、中ソの対立した世界構造と、南の国の安い原料と、世界的な自由貿易的環境と、外国技術の応用、つまり外部要因で成立していたのだと気付き始めたのだ。そして、気付いたからと言って、どうなるものでもなかった。

文化的にも経済的にもアメリカの衛星国となり果てていたのだと気付いた日本国民は、ナショナリズムの旗を振るうにも、その根拠は実に曖昧なものだと自覚せざるを得なかった。とにかく、戦後長期に渡って続いた友好的な日米関係が初めて国民レベルでひび割れたのだ。

クレムリンのどの官僚にとってもそれは絶好の機会だった。だがクレムリンは冷静で、慎重だった。日本を極東のフィンランドとするのは無理だとよくわかっていた。もしソビエトが強硬な態度をとっていたら、日本は間違いなく軍備を拡充し、核武装に踏みきっていただろう。

恐慌後、さらに円の暴落後、方向のないナショナリズムは再軍備を主張したのだが、繁栄の夢の残骸が、僅かに残る相互依存の道を照らし、再軍備・核武装は国民の合意を得なかったのだ。

ソビエトは、長期の展望に立って、瀕死の日本に信じられない譲歩を見せた。北方領土の、二段階返還の提案がそれだ。平和条約、経済協力の進展に依じて、二年以内に、歯舞、色丹の二島を返還、さらに一九九五年までに、国後、択捉を返す、というもので、これは日本にとって、唯一つの明るいニュースだった。さらに、千島列島海域の漁業交渉でも大幅な譲歩を確約し、ソビエト連邦は日本にとってアメリカに代わる新たな父権国家としてのイメージを持ち得る可能性を手にしたのだった。

そのイメージに、多くの国内勢力が便乗しようとした。まず、社会新党は政府・財界から成る対ソ交渉のフロント組織に何とかして入り込み、主導権を握ろうとした。次に、朝日新聞を中心としたマスコミが続いた。それまでソビエトの悪口で食っていた多くの言論人が転向した。そいつらが狩猟社を目の敵としたのは言うまでもない。

だが、目の敵にされても俺達は潰されなかった。ソ連に対する根強い嫌悪感が敵として残っていたからだ。司法当局を含むすべての権力が親ソに染まっていれば、狩猟社はあつという間に消滅していただろう。「クロマニヨン」が二千名を越え、数億の回転資金があるといっても、そんなものは国家の前には無に等しい。

「オレは時々、日本人であることがいやになるよ」

そんなことを言うのは洞木だ。

「要するに誰でもいいんだ、保護してくれるんだったらどの国でもいいと思ってる、考えるのは金の

ことだけだ、価値観の違いなど氣にとめない、そもそも価値観などないのかも知れない、そういう意味で言えば守るべきものを何一つ持たない国なのかも知れない、どうしてそんなことになったのだろう、やはり占領、侵略の経験がないからかな、目の前で親兄弟を殺されたことがないんだ、オレはいつも不思議だったよ、大東亜戦争で無条件降伏をしたのが今でも不思議でしようがない、戦争の原因は常に経済だと思うが、戦争を続けるためには価値観の相違が条件だよな、宗教が一番いい例だけど、あいつの考へてゐることはわからない、あいつは嫌いだ、あいつをやっつけてしまえ、大東亜戦争はまさにそういう価値観の戦いだつたわけだ、グラマンと零戦にしたつてその価値観が反映されて典型的に違うタイプの戦闘機だからね、そういう価値観に基づく戦争をやっておきながら、つまり宗教戦争と同じくせに、無条件降服とは何だ？ それも、本土決戦もせずに……ナチスドイツはしようがないよ、ベルリンが落ちたんだから、もう戦いようがない、しかし日本は違う、オレは今でもプライドを持てないね、たかが原爆二個で降服しやがつて、米軍は日本上陸に関して米兵の死者を五十万と見ていたというからな、どうしてギブアップしたんだ？ ベトナムのごとき小国が勝つた例もあるんだぜ、それほど侵攻作戦は難しいんだ、米軍の戦死者予測は正しいと思うよ、それなのに、どうして平気で降服したの？ 陛下がアメリカに殺される可能性もあったというのに、オレには信じられない、そんな国にプライドが持てるか？ きつとびびってしまったんだよ、恐かつたんだな、敵が上陸してくるということが恐かつたんだ、全国民がびびつたんだ、経験がないからな、全員で、ガキから年寄りまで竹ヤリで突撃すればよかったんだよ、だつてそう教育したわけだろ？ 米軍だつて幼児や女やじいさんばあさんが殺しても殺しても竹ヤリで突っ込んでいけば氣味悪がつて戦争やめたかも知れないよ、

それで何だ？ 今度はソビエトだ？ 信じられるか？ アメリカは占領が下手だった、アメリカにも占領された経験がなかつたからだ、だがアメリカは日本を変えようとした、価値観の合わない部分

が不快だったからだ、GHQのやったことはそれだ、しかしソ連はそんなことじゃすまないぞ、あれほど占領のうまい国はない、気付いた時にはもう遅いんだ、オレはな、前から北方領土の返還には、反対してたんだ、オレの皇国史観には反するけどさ、ロシアに対する反発のシンボルとして、ずっと利用できると思ってたんだ、それが現実になっちゃったよ、

価値観なんて簡単に生まれるものじゃないよな、生きるために自然と形作られていくものだろう？民主主義がなければアメリカは国を作れなかったんだ、そして、日本の場合は、決まった価値観を持たなくても生きてこれた、というより、生きるためにはある一つの価値観を持つてはいけなかったんじゃないか？オレは陛下の赤子と自分のことを思っているが、陛下はオレ達の価値観では断じてない、むしろ戦前などは、価値観が埋没した時代にうまく利用されてしまわれたと怒ってるんだ、陛下は理想だよ、人格としての、理想の存在であられるんだ、

ロシアは怖いぞ、だが逆説的に言えば、ロシアに占領されて初めて日本国民は気付くかも知れん、本土決戦をしなかったことを後悔するだろう、ロシアに占領されて、初めて、国際感覚が身につくかも知れん、だが、それも日本が消滅しないとすればの話だけだね」

皇国史観を別にすれば、狩猟社に結集した全員が洞木と同じ危機感を持っていた。誰もがソ連とその一派に対する敵意を剥き出しにしていたが、わからないのが、アメリカすなわち「ザ・セブン」の態度だった。日ソの接近に、中国は連日警戒と抗議の政府声明を発表していたが、アメリカは沈黙を守ったままだった。

アメリカは冷たいのだ、という世論が生まれ定着しつつあった。

アメリカ政府は国内問題に追われ国際的な発言力を低下させていたのも事実だ。アメリカの国内問題とは主にメキシコからの大量密入国者のことだ。恐慌以後、アメリカと、EC、特にイギリスは、債務国制裁に乗り出し、資産凍結合戦を繰り返して、中南米諸国の憎しみをかっていた。南の人々は

意図的に不法入国し、テロを繰り返した。アメリカは二重に分裂していたのだ。つまり、白人系市民と有色人種、そして、経済と、政治。資産凍結合戦の折、すでに「ザ・セブン」は、秘密裡に中南米の軍事政権と接触を重ねていた。「ザ・セブン」は、当然のことながら、アメリカ政府よりも緊密なコネクションを持っていたからだ。

日ソ接近にアメリカが慌てないのは、「ザ・セブン」がついに政府を超えた権力を持ち始めた証拠ではないか、それは高榎を始めとする狩猟社の考えだった。「ザ・セブン」がソ連に深く浸透しているのは周知の事実だったからだ。

だとすれば、どうして狩猟社への資金援助を続けているのか？ 日本のファシストの党へ政治献金などとヨーロッパの新聞で叩かれながら、シャノン・ジャバンは、年間三億にものぼる金額の援助を続けていた。俺達が、餅を与えられて、利用されているのは間違いない。だが、何のために？